国語

（解答番号 1 ～ 36）

第4問

次の文章を読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。(設問の都合で送り仮名を省いたところがある。)(配点 50)

A

世(注1)之学者、動(1)以杜詩(注2)為難解、不肯一過目。所呻吟(注3)者、非宋・明(注4)即晩唐。詎知、薫染既深(注5)、後雖欲進乎杜、也可得乎。

説(注6)者謂、学者当登高自卑、不可躐等(注7)。此言近(2)是而非、道有不同故也。如上泰山(注8)由梁父(注9)而登、此之謂自卑。若歴鳧・繹(注10)而冀造日(注11)観之巓、跡之愈労、去之愈遠矣。

B

然則学杜者当何如而可。余曰、検杜之五律(注12)中浅近易明者、如「天河」「蛍火」「初月」「画鷹」「端午賜衣」詠物等篇、反復尋(注13)繹、心目自明、門戸不患其不望見也。由此而進、歴階升堂、

C

殆(ほとんど)有レ期(ラン)矣。

（黄子雲(こうしうん)『野鴻詩的(やこうしてき)』による）

（注）

1 世之学者――近ごろの、学問・文芸を修めようとする人。

2 杜詩――唐代の詩人、杜甫(とほ)の詩。唐代の詩は、初唐・盛唐・中唐・晩唐の四つの時期に区分され、杜甫は盛唐の詩人。

3 咿哦――吟詠する。朗唱する。

4 宋・明――ここでは、宋代・明代の詩を指す。

5 薫染――影響を受けること。

6 説者――説を述べる人。論者。

7 躐等――段階を飛び越えること。

8 泰山――山東省にある名山。

9 梁父――泰山の麓(ふもと)にある低い山。

10 鳧・繹――鳧山と繹山。ともに泰山から見て遥(はる)か南にある低い山。

11 日観――日観峰。泰山の最も高い峰の一つ。

12 五律――五言律詩。なお、「天河」より「端午賜レ衣」までは、杜甫の「詠物」詩（具体的な物を詠じた詩）の作品名。

13 尋繹――探究する。

問1　傍線部(1)「動」・(2)「是」の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 29 ・ 30 。

(1)「動」 29

① いきなり
② みだりに
③ いやしくも
④ とかく
⑤ まれに

(2)「是」 30

① このこと
② 似ていること
③ 離れていること
④ あらゆること
⑤ 正しいこと

問2　傍線部A「詎知、薫染既深、後雖レ欲レ進ニ乎杜一也可レ得乎」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 31 。

① 詩を学ぶ者は、宋代・明代の詩や晩唐の詩の影響をすでに色濃く受けていることを知っているので、のちに自分から杜詩を学ぼうとはしないのだ。

② 詩を学ぶ者は、宋代・明代の詩や晩唐の詩の影響をすでに色濃く受けてはいても、のちに杜詩を学べばまた得るところがあるのを知らないのだ。

③ 詩を学ぶ者は、宋代・明代の詩や晩唐の詩の影響をすでに色濃く受けてしまっているが、のちに杜詩を学ぼうとするのに何の妨げもないことを知らないのだ。

④ 詩を学ぶ者は、宋代・明代の詩や晩唐の詩の影響をすでに色濃く受けてしまっていることを知らないので、のちに杜詩を学ぼうとしても、もはや得るところはないのだ。

⑤ 詩を学ぶ者は、宋代・明代の詩や晩唐の詩の影響をすでに色濃く受けてしまっているので、のちに杜詩を学ぼうとしても、もはやできなくなっていることを知らないのだ。

問3 第二段落で、筆者は詩を学ぶことを山に登ることに喩えているが、それぞれの対象として挙げられているものの対応関係を次のような表にまとめた場合、空欄Ⅰ～Ⅲに入るべき語の組合せとして最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 32 。

Ⅰ	杜詩	
Ⅱ	杜詩の中の「天河」「蛍火」「初月」「画レ鷹」「端午賜レ衣」などの作品	
Ⅲ		宋・明・晩唐の詩

① Ⅰ 梁父 Ⅱ 鳧・繹 Ⅲ 泰山
② Ⅰ 鳧・繹 Ⅱ 梁父 Ⅲ 泰山
③ Ⅰ 泰山 Ⅱ 梁父 Ⅲ 鳧・繹
④ Ⅰ 梁父 Ⅱ 泰山 Ⅲ 鳧・繹
⑤ Ⅰ 泰山 Ⅱ 鳧・繹 Ⅲ 梁父

問4 傍線部B「然 則 学レ杜 者 当二何 如一而 可」について、(i)書き下し文・(ii)その解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 33 ・ 34 。

(i) 書き下し文 33

① 然らば則ち杜を学ぶ者は何れのごときに当たらば而ち可ならんや
② 然らば則ち杜を学ぶ者は当に何如ぞ而ち可とせんや
③ 然らば則ち杜を学ぶ者は当に何れのごとくにすべくんば而ち可なり
④ 然らば則ち杜を学ぶ者は当に何如なるべくんば而ち可なるか
⑤ 然らば則ち杜を学ぶ者は何如に当たりて而ち可ならんか

(ii) 解釈 34

① それならば、杜詩を学ぶ者はいったいどのようであればいいのであろうか。
② そうではあるが、杜詩を学ぶ者はどうしたらいいのかわかっているのであろうか。
③ それならば、杜詩を学ぶ者はどのようなときに対処できるのであろうか。
④ そうではあるが、杜詩を学ぶ者は本当にどのようなことも可能になるのだ。
⑤ さもなければ、杜詩を学ぶ者はどのようなときにも実力を発揮できないのではないか。

問5 次に示したのは、波線部「杜之五律」の一例として挙げられた「蛍火」の詩とその現代語訳である。本文の主旨を踏まえたこの詩の解説として最も適当なものを、次ページの①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35 。

蛍火　　蛍の光

幸因腐草出　　蛍はもともと腐敗した草から生まれ出るもの、
敢近太陽飛　　どうして太陽などに向かって飛んだりしようか。
未足臨書巻　　ほのかな光は書物を読むには役立たないが、
時能点客衣　　時には旅人である私の衣にとまり光を灯す。
随風隔幔小　　風に乗ってとばりの向こうに飛んでいっては小さく見え、
帯雨傍林微　　雨にぬれて林の方へ向かっていってはかすかな光を発する。
十月清霜重　　冬十月の冷たい霜も繁くなるころ、
飄零何処帰　　衰え弱ってどこに行くのだろうか。

① この詩は、蛍が人間の幸福になにも寄与しないことを批判的に描写しており、そこに作者の自らへの戒めとする態度が読み取れる。このような、身近な題材を用いつつ表現意図が明確に示された詩を学ぶことが、難解な詩を理解する基礎となる。

② この詩は、蛍が人々にとって身近な存在であることを修辞を凝らして描写しており、そこに作者自身のあこがれも表現されている。このような、身近な題材を用いつつすぐれた技巧が生きている詩を学ぶことが、難解な詩を理解する基礎となる。

③ この詩は、蛍が生まれた所に戻ろうとしない無情なさまを客観的に描写しており、そこに作者の望郷の思いが図らずも浮き彫りにされている。このような、身近な題材を用いつつ叙情性も備えた詩を学ぶことが、難解な詩を理解する基礎となる。

④ この詩は、蛍のか弱い生態を様々な角度から同情的に描写しており、そこに作者自身の消極的な人生態度も自然に吐露されている。このような、身近な題材を用いつつ複雑な情緒を表現している詩を学ぶことが、難解な詩を理解する基礎となる。

⑤ この詩は、蛍の寄る辺なくさまようさまを多様な角度から描写しており、そこに作者自身の旅人としての姿も投影されている。このような、身近な題材を用いつつ平易でかつ内容に奥行きのある詩を学ぶことが、難解な詩を理解する基礎となる。

問6　傍線部C「由レ此 而 進、歴レ階 升レ堂、殆 有レ期 矣」からうかがわれる筆者の主張を説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 36 。

① 山に登る場合、下から一歩ずつ着実に登ることが大切だが、学問・文芸を修めようとする場合も、この原則を守れば高度な作品を避けて始めたとしても順調に上達し、いずれすぐれた境地に達するときがくるのだ。

② 山も登る対象を誤ると高い頂上にたどり着けなくなるので、学問・文芸を修めようとする場合も、人々から注目されている分野を選んで着実に始めれば順調に上達し、いずれすぐれた境地に達するときがくるのだ。

③ 山にもさまざまな高さのものがあるように、学問・文芸を修めようとする場合も、どれを対象として選択してもよく、初歩から一歩ずつ着実に始めれば順調に上達し、いずれすぐれた境地に達するときがくるのだ。

④ 山に登る場合も学問・文芸を修めようとする場合も、選ぶ対象が重要であって、どちらも高い目標を選択して、その低いところから着実に進み始めてこそ順調に上達し、いずれすぐれた境地に達するときがくるのだ。

⑤ 山の頂上にたどり着くにはなるべく安全な道を選ぶべきで、学問・文芸を修めようとする場合も、同様に基礎的でわかりやすい内容のものから始めれば順調に上達し、いずれすぐれた境地に達するときがくるのだ。